

## アレン・テイト『父祖たち』と歴史の「深淵」

小谷, 耕二  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5441>

---

出版情報：言語文化論究. 9, pp.39-49, 1998-03-01. 九州大学言語文化部  
バージョン：  
権利関係：

## アレン・テイト『父祖たち』と歴史の「深淵」

小 谷 耕 二

南部文芸復興期の代表的な詩人・批評家 Allen Tate が書いた唯一の長編小説 *The Fathers* (1938年)は、詩人の筆のすさびとみなされたわけでもあるまいが、十分に論じられているとは言いがたい作品である。このことには作品の出来ばえとはやや異なる次元の問題が絡んでいるように思える。つまり、読者の側の解釈の回路の問題である。この作品が、旧南部の秩序を体現する Major Buchan と、それに相対立する George Posey という新旧対立の基本的構図をもっているために、作品内のあらゆる要素がその構図の生み出す形式上の統一に馴致されて、解釈の回路が固定化してしまう。いわば読みの自動化作用が生じ、作品に新たな光をあてることを困難にしているのではないかと思えるのである。こうした現象は、それ自体としては、なにもこの作品に限ったことではない。ただその新旧対立の構図に潜在している南部の神話が、知らぬまに読者の思考にも強力な神話作用を及ぼしているのではないかと疑わせるに足る、興味深い光景である。

とはいえ、そうした対立の存在自体を否定することは、作品を歪曲してしまうことになるだろう。ただジョージ・ポウジーという人物のもつ一種異様なまでの暴力的な激しさは、その構図をステイックに捉えるだけでは説明できない。それは、その構図の深層に横たわり、そうした対立自体を招来するひとつの「深淵」に根ざしているように思える。そこで小論では、ポウジーの発散する謎めいた不可解さに特に焦点をあて、『父祖たち』を読み直してみたい。

## I

『父祖たち』は三部構成で、ヴァージニアの名門 Buchan 家の三男 Lacy Gore Buchanが、50年ほど前の少年時代を回想する形式をとっている。レイシーは南北戦争勃発前後の時代を背景に、バカン家と姉 Susan の嫁ぎ先である Posey 家に起きる一連の出来事を物語るのだが、回想の動機について、こう述べている。

Is it not something to tell, when a score of people whom I knew and loved, people beyond whose lives I could imagine no other life, either out of violence in themselves or the times, or out of some misery or shame, scattered into the new life of the modern age where they cannot even find themselves? Why cannot life change without tangling the lives of innocent persons? Why do innocent persons cease their innocence and become violent and evil in them-

selves that such great changes may take place? (*The Fathers*, 5)<sup>1)</sup>

レイシーは医者で、未婚のままである。彼の現在について明らかなのはそれだけであって、回想を通して過去の意味を問いかけることが、どのようにして自分が現在の姿に至ったかを説明することに直結しているとはいえない。彼の過去と現在をつなぐ糸は、たとえあるにしても、か細いものであるか、ほとんど読者の目には見えないものである。むしろ過去は過去のまま完結して、そのなかで自分の愛した人々がいかに時代の変化の波に呑みこまれていったかを、レイシーは鎮魂の思いをこめて語ろうとしているように思える。

とはいっても、作者テイトが過去の世界をノスタルジー一色に染めあげているわけではないし、現在というものに対する時代感覚を欠いていたわけではもちろんない。テイトは時代の変化を生みだし、またそれを象徴しもする力を作品内に導入している。それがジョージ・ポウジーが具現しているものであり、このポウジーが表象するものと、バカン少佐が体現する旧南部の価値観や秩序との対立が、この作品に劇的な緊張を与えているのである。またレイシーの語りも、物語のなかの出来事を直接自分で見聞きしたときの少年のまなざしに、回想している老人レイシーのまなざしがときおり交錯し、この二重の視線が作品に陰翳を与え、語られた出来事の意味の広がりを生みだしている。

## II

“Pleasant Hill”と題された第一部は、ヴァージニア州フェアファックス郡のバカン家の屋敷プレザント・ヒルを舞台にしている。ここでレイシーが回想するのは1860年4月の母の葬儀の日の出来事である。そしてそのなかに、その2年前に、ポウジーがスーザンに求婚するためにプレザント・ヒルをおとずれたときの出来事や、その翌日の馬上槍試合のエピソードがフラッシュバックの形で挿入されている。

『父祖たち』についてもっとも早い時期に本格的な批評を書いた Arthur Mizener 以来、この作品の論者が一様にレイシーの父バカン少佐とジョージ・ポウジーの対照性を指摘している。<sup>2)</sup> バカン少佐は旧南部の伝統的な秩序の具現であり、個人の自己の表現が共同体の秩序と重なり合うような存在の様式を表している。一方、ポウジーはそのような秩序に組み込まれず、それを脅かす力を表している。彼にとっては私的な自己の表現は、公共の規範とは独立した形で、そのまま自己の表現として成立する性質のものである。

この二つの存在の様式の葛藤と、その狭間で揺れながらレイシーがそこに見いだそうとする意味の探求が、このセクションの(そして作品全体の)主題であるといってよい。プレザント・ヒルの世界の住人にとって、ポウジーは不可解な存在である。彼は、礼儀作法を無視して、レイシーの母の葬儀の際にどこかへ姿をくらましてしまう。バカン少佐にスーザンへの求婚を申し出たときも、承諾を求めるといっても、同意されようがされまいが、通告しておくといった口吻である。彼がレイシーにあげた銃のことで、バカン少佐が丁重ではあるが、侮辱すれすれの棘のある言葉で銃をもらういわれはない旨伝えても、平然と受け流している。「気品のある紳士」(23)の作法からは逸脱する、ポウジーのこうした態度に、少年レイシーはなにか異常で暴力的なものを感じとりながらも、その一方で、父の無力さを嗅ぎとり、「崖っぷちの向こうまでポウジーの後についていきたい」(10)と考え

もする。

ポウジーは共同体の慣習にとらわれず、自分の考えるまま、衝動のおもむくまま行動するという点では、個人主義者である。ビジネスのことはなにもわからぬバカン家の人間とは異なり、冷徹な合理精神もあわせもった現代人でもある。ただそのことは、彼が共同性が与えてくれる防御壁やぬくもりを剥ぎとられて、裸形のまま世界に向き合わざるを得ないということの意味している。レイシーの目に映る彼の孤独な印象、その存在の暴力的な激しさはそこに由来している。こうした観点から見れば、ポウジーの行動はたんなる慣習の侵犯という次元にとどまらぬ意味をもつことになる。

ポウジーが葬儀に参列しなかったことを、レイシーは次のように意味づけている。

My new brother George had needed intensely to leave, to escape from the forms of death which were, to us, only the completion of life, and in which there could be nothing personal, but in which what we were deep inside found a sufficient expression. (22-23)

そもそも葬儀を含めあらゆる儀式は、秩序を維持する慣習として、重要な役割をはたしている。それは共同体の構成員の無定形な感情や行動に意味を与え、ひとに帰属感と一体感をもたらししてくれるものであり、同時にそうすることで共同体を持続させていく働きをもつ。たとえば葬儀を通して、死は生命のたんなる終息という生物学的なあるいは物理的な自然現象から、共同体特有の文化的意味をになった人間的現象に変貌する。そこではじめて、ひとは死というものといわば折り合いをつけることが可能になる。ポウジーは「パーソナルな」ものが儀式のなかで失われるのを回避しようとする。しかしそのために、「自分のなかにあるもの」を自分ひとりで背負い込まざるを得なくなるのだ。彼は死というものに、そしてそれゆえ、生というものに意味を与えてくれる形式もないまま、自分の内部にひとつの「深淵」を抱え込むことになる。

### Ⅲ

ポウジーの生のあり方は、逆に儀式の効用を浮かびあがらせている。しかし、プレゼントン・ヒルの世界では儀式は形骸化している。『父祖たち』のなかではテイトは旧南部の価値観にノスタルジックな希望を投影しているようには思われぬ。長いフラッシュバックによって挿入された馬上槍試合のエピソードが示しているのは、そのことである。

このエピソードにおいても、ポウジーは相変わらず慣例を侮蔑ないしは無視している。彼は初参加で、これまで常勝の John Langton をおさえて優勝する。勝者は表彰式で勝利の栄冠の花輪を、自分が愛し崇拝する女性の頭に載せてあげるのが慣例なのだが、ポウジーは、スーザンが花輪を載せてもらおうと慣例通り頭をかがめたときに、すこし躊躇した後で彼女の膝に花輪を落として、笑い出している。これにはスーザンも、大会の主催者の Broadacre 氏も、観客も驚きを隠せずにいる。

判定に不服のラングトンは、表彰式の席上でポウジーとちょっとした悶着を起こし、彼に決闘を申し込む。ここでもポウジーは、正式の決闘の慣例には従わず、決闘用の武器と

して準備された銃の卓越した腕前を誇示した後で、ラングトンに殴りつけて決着をつけている。旧南部の価値観からすれば、ラングトンにとってはこうした形での決着は、名誉を回復する機械を奪われたことを意味しており、さらなる侮辱といえるであろう。もっとも、ラングトンは酒に酔って試合に参加していたのであり、またその傲慢な性格と悪意のある行為が強調されてもおり、読者が彼に共感することはありそうもないが。

馬上槍試合といい、決闘といい、現代の読者の目にはいかにも古色蒼然とした時代錯誤の世界に見える。当時13才のレイシーはこうした出来事から英雄的なポウジー像をつむぎだしているが、作者テイトはそこから一歩身を引いて、距離を置いているとみてよい。ひとつには、大会の主催者ブローデイカー氏の描き方が風刺的である。表彰式での彼の挨拶は“gentleman”を古風に“janetleman”と発音し、きわめて儀礼的で、格式張ったものである。

“But if this is true of you, young janetlemen,” and he bowed to the riders, “where shall I find the eloquence to praise the ladies, without whom your efforts here today in this contest were in vain? It is the ladies alone who are the repositories, nay, the gyuardians of our virtues, it is they, it is for them that you have achieved this brilliant performance.” *He looked uneasy for an instant, then he shouted: “The ladies! Got bless the ladies!”* (66; my italics)

ブローデイカー氏が一瞬落ちつかない様子を見せたのは、ポウジーの優勝という思わぬ結果と、それに続くポウジーとラングトンとの一悶着にうろたえていた彼が、噛み煙草を吐き出すのを忘れ、どうやら挨拶の途中で飲み込んでしまったからである。こうした滑稽な一節を挿入することで、テイトは、ブローデイカー氏が大袈裟に称揚する南部貴婦人と騎士道精神の神話に揶揄するようなまなざしを注いでいるのである。

さらに、テイトはプレザント・ヒルの世界の基底を揺るがすもうひとつの工夫を講じている。決闘の様子を見ようとして、馬上槍試合の観覧席となっていたパヴィリオンの舞台の端のところへ移動したときに、レイシーはブローデイカー氏の息子の Winston と黒人の少年、それに白人のような顔立ちをした混血娘に出会うのだが、この三人がパヴィリオンの舞台の下で性的な戯れを演じていたことを、テイトは暗示している。その間、舞台上ではブローデイカー氏が南部貴婦人を賛美する演説をぶっていたのだ。これは、南部貴婦人の神話や騎士道精神の尊重といった旧南部の価値観の下部に、南部社会のタブーである種族混交が厳然として存在していることを端的に表象する、一種図像学的な構図とさえいってよいであろう。テイトは旧南部の秩序を象徴するプレザント・ヒルの足下に黒々とした「深淵」がぱっくり口を開けていることに気づいていた。

#### IV

第二部“The Crisis”では、レイシーはバカン少佐とともに、ワシントン近郊 Alexandria にある従兄 John Semmes の家に滞在している。そこでは第一部のスタティックなプレザント・ヒルの世界と打って変わって、時代の激動の木霊がレイシーの回想に鳴り響い

ている。1860年12月のサウス・カロライナ州の連邦離脱決定を皮切りに、1861年1月にはジョージア州をはじめとして深南部の諸州の連邦離脱が相次ぐ。そして4月には南軍がサムター要塞を攻撃し、これを機にヴァージニア州も連邦離脱に踏み切り、南北戦争へと突入していく。

こうした時代の変化のなかで、プレザント・ヒルの世界も危機にさらされる。ポウジーがプレザント・ヒルの地所を管理することになり、バカン少佐の意に反して、彼は黒人の召使い Jack Lewis 一家を売り払ってしまう。破産が目に見えているのに、黒人を売買しないのは、ポウジーにとっては「気むずかしいわがままで子孫に犠牲を強いること」(134)にはほかならない。一方、バカン少佐からすれば、プレザント・ヒルの家屋敷や召使いたちを金銭に換算しうる資産とみなすこと自体が、容認できない考え方である。旧南部の価値観のなかでは、ひとはその住んでいる場所と切り離せないものであり、どのような生活様式をしているか、またどんな行動の規範を有しているかがひとを判断する際には重要であって、どんなことで生計をたてているかは口にすべきことですらないからである。この両者の立場の違いについて、レイシーは双方の言い分にそれなりの正当性を認めているが、いずれにせよ、バカン少佐と彼が体現する旧来の価値観が、時代の流れのなかで取り残され、立ちゆかなくなっていることは明らかである。

バカン少佐はヴァージニアの参戦の機運が高まるなかで、どのように事態に対処するかという点でも孤立していく。彼は連邦離脱に反対で、いずれ騒ぎは収まると考えている。しかし長男の Charles は合衆国陸軍の將軍付き参謀の地位を辞し、Lee 大佐（後のリー將軍）にならって、ヴァージニアの軍隊に身を投じる。次男の Semmes も勤当も辞さずに連邦離脱・参戦を強く主張する。ジョン・セムズは、アレクサンドリアでライフル兵の組織化に奔走し、ついには連邦軍に逮捕される。ポウジーはポウジーで、アレクサンドリア・ライフル隊への武器供給を一手に引き受けている。そしてレイシーも、南部全体に拡がっている時代のうねりを、まるで「隣人や親類の息子たち」だけが騒いでいるかのように考えている現実離れした父の様子に、疎隔感を抱くのである(155)。テイトがバカン少佐とプレザント・ヒルの世界に、容赦のない現実には拮抗し得ぬ無力さを見ていることは疑いないであろう。

しかし、だからといってその対極にあるポウジーの世界に、テイトが与しているわけではない。バカン少佐は、アレクサンドリアの熱狂的な戦争熱の影響から遠ざけておくために、レイシーを Georgetown のポウジー家の姉のもとにやるのだが、レイシーがここで目にするのは、一種狂気じみた「深淵」の世界である。ポウジー家の人間は皆自分自信のなかに引きこもっている。ポウジーの叔父 Jarman 氏は、文人になる夢がかなわず、Poe の「Roderick Usher のように」(178)、屋根裏部屋に閉じこもったままである。Aunt Jane Anne は、過剰な病弱の意識のなかに閉じこもり、Aunt Milly もジャーマン氏と同じように世捨て人同然の生活を送っている。ポウジーの妹 Jane も引きこもりがちで、外に出るのは修道院に音楽の練習に行くときくらいのものである。家族が一緒に食事をすることもなく、ポウジー家は「みんな声を潜めて、病弱さを通してだけ意思の伝達をしているような世界」(182)である。

レイシーはこれを、あらゆることが何らかの意味をもち、その意味に共通の理解ができあがっているような、確固とした秩序が失われた結果であると考えている。彼はアレント・

ジェーン・アンやアート・ミリーについて、次のように述べている。

The Posey ladies were not eccentric, not “two peculiar old ladies,” but rather excessively refined sensibilities that had let their social tradition lapse in personal self-indulgence in which the draught under the door, the light shifting through the blinds, the remote threat of rain—into which, of course, they would not have ventured—became the overwhelming concerns of life. (184)

感受性が過剰に研ぎすまされたことで、かえって伝統的な慣習や儀式が個人の些末なこだわりまで形骸化して、外的な公共の世界との結びつきを失ってしまう。そして、自分だけのこだわりの殻のなかに引きこもって、そこから出てこようとしなくなる。そうした事態がポウジー家のなかに現出しているのである。

ジョージ・ポウジーの生のあり方はこうした状況のなかで育まれてきたものであった。象徴的な、そして本質的な意味合いにおいて、ポウジーには家族も帰属する場所もない。そこには共同性が欠落しており、彼の抱く激情は意味づけを与えてくれる水路をもたず、混乱したまま野蛮な暴力となってほとぼしる。レイシーは、「バカン家よりも洗練されているが、文明化されていない」(179) ポウジー家の世界について反芻しながら、こう述べる。

Excessively refined persons have a communion with the abyss ; but is not civilization the agreement, slowly arrived at, to let the abyss alone? (185-6)

文明とは、それによって人間の内部に横たわる「深淵」をいわば手なずけておく伝統の形式である。しかし、過度の洗練はそれを逆説的に呼び寄せてしまう。そして、「深淵はそのままにしておくという同意」が失われた場所で、ポウジーはひとりきりで「深淵」と向かい合わねばならないのだ。

## V

第三部 “The Abyss” において、レイシーは1861年の5月から7月までの二ヶ月間に「普通ならば二世代分の時間を必要とする変化をもたらしした災厄」(117) が、次から次へと出来するのを目撃することになる。災厄は Yellow Jim がポウジー家に逃げ帰ってくるところから始まる。イエロー・ジムはジョージ・ポウジーの父が召使いの黒人女 Old Atha に生ませた子供であるが、ポウジーに栗毛の馬と引き替えに売り飛ばされていた。イエロー・ジムの帰還から一週間ほどして、レイシーの兄セムズがポウジー家を訪れる。セムズはポウジーの妹 Jane に求婚するためにやってきたのである。レイシーはジェーンを以前から愛していた。そのことを知っており、またポウジー家の人間と結婚するのは自分だけでたくさんだと思っていたスーザンは反対するが、セムズはすでにジェーンの同意を得ており、彼女の母アート・ジェーン・アンの承諾もとつけていた。そして結婚式を翌日に控えた深夜に事件が起こる。ジェーンが何者かに（イエロー・ジムに？）襲われ

た（レイプされた？）のである。アレント・ジェーン・アンはショック死し、ジェーンはスーザンの命令ですぐさま修道院に入ることになる。スーザンはイエロー・ジムを「川上に (up the river)」(227)<sup>3)</sup> 連れ出して、殺すようにレイシーに命じるが、レイシーは彼をしばらくかくまっておく。しかし、帰ってきたポウジーが、セムズとレイシーとともにイエロー・ジムを「川上に」連れ出したときに、セムズがイエロー・ジムを射殺し、ポウジーはセムズを射殺する。

この一連の出来事には謎めいて曖昧なところが多い。そもそもその夜実際に何が起きたのかははっきりしない。イエロー・ジムは廊下にうずくまっており、ジェーンは寝室に仰向けに倒れていた。彼女のナイトガウンは「まるで手足を被うようにだれかが注意深く引き延ばしたみたい」(226) だったが、左の袖が破れ、浅いひっ掻き傷があった。そこでレイシーは「どんな男でも考えたであろうこと」(227) を考え、嘔吐感に見舞われている。イエロー・ジムにレイプされたということが暗示されているが、確証はない。しかも、スーザンが倒れているジェーンの踝からふとももへと手を滑らせて、ナイトガウンの襷になった部分を調べたときに、困惑の表情が目につかんだのを、レイシーは見てとっている。この困惑の表情はなにを意味するのだろうか。実際にレイプがあったのだろうか。またほんとうにイエロー・ジムの仕業だったのであろうか。こうした疑問は完全には払拭できないのである。

イエロー・ジムは事件の後ジェーンの部屋に行ったことを、レイシーに認めている。しかし彼の告白は混乱していて、そこでなにが起きたのか、またなぜ行ったのか、その動機がはっきりしない。彼はジェーンが8才か9才の頃からそのお守り役をしており、愛情と献身を注いでいた。ただ、3年間の不在でそうした関係がすっかり変わり、ジェーンにとって自分が見知らぬ人間ようになっていた。そのため昔のような関係を取り戻したいと思っていた。しかしそうした気持ちがジェーンを襲うという行為に直結するとは考えにくい。この点については、スーザンが裏で糸を引いていたのだという説もある。<sup>4)</sup> スーザンはセムズとジェーンの結婚には反対であった。そこで結婚を阻止するために、イエロー・ジムに襲わせたというのである。たしかにレイシーが、イエロー・ジムは結婚を阻止するためにスーザンに利用されたのだと考えている場面があり (244)、スーザンの困惑の表情もイエロー・ジムが実際にレイプしなかったことに由来すると考えることもできよう。またこの出来事の現場での彼女の冷静沈着な対応も、あらかじめすべてわかっていたからだともみなすこともできよう。しかし、スーザンがイエロー・ジムをそそのかしたのだとすれば、それは、なにか不可解な衝動につき動かされてしまったのだという、彼の告白が与える印象とうまく噛み合わないように思える。

ジョージ・ポウジーがセムズをなぜ射殺したのかも、同じようにはっきりしない。なによりもまず、ポウジーがこの出来事をどれだけ重大なこととみなしていたのか、疑わしいところがある。事件後初めて彼がセムズとレイシーと顔を合わせたときに、まず切り出したのは、どうやら武器の密輸で危うく刑務所行きになりそうになり、金で決着をつけたという話である。そしてセムズが一瞬驚いた表情になったのを見てはじめて、「なにか片づけなくちゃならないことがあったんだね」と、事件のことに言及するのである。まるで雑用を処理するかのような事務的な調子に見える。そこでセムズはイエロー・ジムの処分に関して「お互いわかっていると思うが」と念を押さざるを得ないのである (250)。その後、



川の畔の手頃な場所に来て、ポウジーは銃を抜くが、イエロー・ジムに狙いをつけることはしない。そこでセムズが「お互いわかっていると思っていたんだが」と言って、銃を抜くのである。そしてセムズがイエロー・ジムの撃つと同時に、ポウジーはセムズを射殺する。そのときポウジーはイエロー・ジムの殺すつもりはなかったのだと、洩らしている(257-8)。セムズの最後の言葉からすれば、彼はポウジーがイエロー・ジムの撃つつもりがないと判断したのであろう。その点では、ポウジーが洩らした言葉は本当の気持ちを表していたのかもしれない。しかし、そうだとすればポウジーはなぜ銃を抜いたのか。それにここへやってくる前に、かれはこのときのためにセムズに銃を渡そうとしているのである。イエロー・ジムの逃がしてやるつもりだったとして、そもそもそのためになぜセムズを殺す必要があるのか。腹違いの兄弟を殺されることへの怒りのなせるわざなのか。<sup>5)</sup> こうした動機の不可解さが解消されないまま残るのである。<sup>6)</sup>

## VI

こうした不可解さはひとつには視点の問題として捉えることができるであろう。この物語がレイシーによる一人称の視点からの回想という形式をとっているために、スーザンにしるポウジーにしる、その内面の心の動きを客観的に捉えることはできない。すべて外側から観察できる事柄だけしか呈示されないという制約がある。そのうえ、厳密にはレイシーがいわゆる「信頼のおけぬ語り手」ではないという保証もない。彼が自分の語りたいたいことにあわせて、事実の取捨選択をおこなっているという可能性を完全に排除することはできない。<sup>7)</sup> すくなくとも、呈示された事実に対する解釈はレイシー自身の意識のフィルターを通したものであり、そこに意識的か無意識的かを問わず、彼の感情や願望が投影されるのは避けがたいことであろう。そのために事件そのものの、またその渦中の人物の行動の動機の曖昧さが生まれてきている点は否定できない。

しかし、それだけで問題が解消できず、また安易に作品としての不備に責めを負わせることを避けようとするならば、そのような不可解さからどのような映像がたちあらわれてくるかを、考えてみる必要がある。テイトがこの謎めいた一連の出来事を通して描き出したかったものは、いったいなにか。ひとつの解答は、不可解さそれ自体だということになる。イエロー・ジムにしる、スーザンにしる、ポウジーにしる、その行動は理性を超えたなにか奥深い衝動に根ざしているように思える。イエロー・ジムの混乱した告白が与える印象についてはすでに触れた。スーザンについていえば、かりに事件の背後に結婚を阻止しようとする彼女の意図が働いていたとするならば、レイブ事件を画策する巧妙な計算、それに事件の現場での冷静沈着な態度と、それほどまでのポウジーに対する憎しみとの狭間には、狂気と見まがうばかりの黒々とした闇が横たわっている。

ポウジーの場合も、もっともらしい理由で合理化できない暗い衝動がセムズの射殺には潜んでいるように思える。それを悪とってしまえば、人間が作りあげた観念の体系のなかに押し込めてしまうことになる、もっと原初的な、名辞以前の力の発動がそこにあるのではないか。セムズが殺された後、レイシーはプレザント・ヒルに舞い戻るのが、その途中で祖父の幻に出会う。その幻はレイシーに対して次のように述べる。

No, it was not the intention of your brother-in-law to kill your brother. It is never, my son, his intention to do any evil but he does evil because he has not the will to do good. The only expectancy that he shares with humanity is the pursuing grave, and the thought of extinction overwhelms him because he is entirely alone. He is alone like a tornado. His one purpose is to whirl and he brushes aside the obstacles in his way. (267-8)

もちろん、この幻は、みずからの兄が敬愛する人物に目の前で射殺されるという極限的な事態に直面したレイシーの魂が、助けを求めて無意識のうちに呼び寄せたものであろう。そこにはこれまでの自分を失うことなく、ということはこれまで自分が抱えてきたポウジー像を崩壊させることなくということでもあるが、この窮境をなんとか乗り切りたいという願望が反映している。悪をおこなう意図はないが、善をおこなう意思がないために悪をおこなってしまうのだということは、裏を返せばポウジーにとっては善も悪もないということになる。善悪をはじめとして、人間が作りあげ、名づけるもの、すなわち文化や制度や伝統を超越した根源的な力を、レイシーはポウジーのなかに見ているように思える。この力は人間的なものを超越しているために、その発現は通常の人間の目からは暴力的な不可解さを伴うことになるのである。結末近くで、戦場におもむいたポウジーは、ジョン・ラングトンに侮辱的な言葉を浴びせられたというだけで、顔面を撃ち抜いている。これは、一面では旧南部の決闘の儀式と皮肉なコントラストをなしているが、同時にポウジーの原初的な力のもうひとつのあらわれといってよい。

このように考えてはじめて、もうひとつの不可解な疑問も解けるのではなからうか。レイシーはプレゼント・ヒルに帰ると、ショックと疲労のせいで高熱を発し、しばらく生死の間をさまよう。6週間ほどして、病いから回復すると、彼は再会したポウジーと行動をともにして、戦場へと向かうのである。常識的に考えれば、自分の兄を殺した男と行動をともにするのは理解しがたいことである。レイシーは象徴的な死を経て、再生したとみてよいだろうが、それはポウジーの世界への参入を意味していたといえるかもしれない。あるいは、すくなくとも、ポウジーの生のあり方の理解と受容を意味していたといえるだろう。

結末で、レイシーとポウジーはプレゼント・ヒルに戻ってきて、北軍に放火されて屋敷が灰燼に帰しているのを目にする。そして、火を放つ前に与えられた30分の猶予時間のうちにほかの者は逃げ出したが、バカン少佐だけはみずからの手で命を絶ったことを知る。バカン少佐がプレゼント・ヒルの世界に最後まで殉じたのに対して、ポウジーは軍服を脱ぎ捨て立ち去ってゆく。こちららもまたいかにもポウジーらしい身振りといえるだろう。彼は名誉にしる、戦争にしる、なんらかの大義名文にみずからを縛りつけることはしないのである。そして後にひとり残されたレイシーは、戦場に戻ることを決意する。プレゼント・ヒルの世界とポウジーの世界の狭間でポウジーの行動の意味を考え続けた結果、レイシーは彼なりの小さな一歩を踏み出すのである。

## VII

『父祖たち』において、第三部の表題にも用いられた「深淵」という言葉は象徴性を付与されている。小論においても、故意にやや比喩的な意味あいとその言葉を使っている。それは人間の作りだしたあらゆる規範を超越した、原初的な混沌とした無意識の闇である。その力がかつとも典型的にあらわれているのは、ジョージ・ポウジーにおいてであり、彼の型破りの不可解な行動はその発現なのである。儀式や慣習、伝統といった規範は、人間にとってそうした「深淵」から身を守る働きをもっているといえるだろう。レイシーは、“Our lives were eternally balanced upon a pedestal below which lay an abyss that I could not name.” (44-5) と述べている。さまざまな約束事から成り立っている人間の世界、とりわけプレザント・ヒルの世界が、その足下に底知れぬ「深淵」を秘めていたというのは、レイシーだけでなくテイト自身の認識でもあったとみてよい。プレザント・ヒルの世界に相對するものとしてのポウジーは、そうした「深淵」を跣にする存在であった。

こうした一種形而上的な意味あいに加えて、「深淵」には歴史的な側面もあるように思える。それは、テイトが南北戦争の勃発前後という激動の時代を作品の背景にしていることに反映している。バカン少佐の死に象徴される旧南部の崩壊は、共同性が失われ、個人ひとりひとりがお互いになんら結びつきをもたない社会の出現をもたらすことになる。「トルネードのように孤独な」ポウジーの存在様式が、一面ではこうした社会の象徴であることは明らかである。だが同時に、そうした社会の芽は旧南部自体のなかにあったのだということにも、注意しておかねばならない。ポウジー家の一員となったために、ふたつの生活様式、ひいてはふたつの文化の狭間に投げこまれたスーザンの当惑と苦しみについて語りながら、レイシーは次のように述べている。

To Susan life around her in childhood had been final ; there could be no other there never had been any other way of life—which is, I suppose, a way of saying that people living in formal societies, lacking the historical imagination, can imagine for themselves only a timeless existence : they themselves never had any origin anywhere and they can have no end, but will go on forever. (183)

約束事はいったん成立すると、それがほんのしばらく前のことであっても、ずっと以前から持続してきたものであり、その後も永遠に持続するような錯覚をもたらすようなところがある。約束事が張りめぐらされた社会に生きている者は、それが変化しうるものだというのを忘れてしまう。この「歴史的想像力」の欠如が約束事を形骸化させ、かえって変化をもたらす動因となる。プレザント・ヒルの世界、そして旧南部に欠けていたのはこの「歴史的想像力」である。この欠如がポウジーという存在を歴史の必然として招来したのである。歴史的变化の認識を欠くことによって、旧南部の伝統が内側からむしばまれてゆく。その裂け目に黒々と顔を覗かせたのが彼の存在だったのだ。その意味では、ポウジーに発現する「深淵」は、歴史の「深淵」でもあった。

テイト自身は、人間は儀式や慣習や伝統を必要とする存在だと考えていたとみてよいであろう。しかし彼自身が生きた時代は、物質主義や合理主義がはびこり、すでに共同性による人間同士の結びつきが失われつつあった。そこでは人間は自分よりも大きな存在から切り離され、個としての存在を意味づける基盤となるような全体性と統一性を失った不完全な断片と化しつつあった。そうした状況にあつて過去に目をやっても、旧南部の社会はけっしてノスタルジックな願望をそこに投影できるような社会ではなかった。テイト自身歴史の「深淵」を見つめていたわけである。そしてその凝視のなかから、彼はおそらく芸術と宗教とに全体性と統一性の回復の契機を求めていくことになるのである。

### 注

- 1) Allen Tate, *The Fathers* (1938 ; rpt. Athens : Swallow Press, 1990). 以下、この作品からの引用はすべてこの版により、頁数は本文中に記す。
- 2) Arthur Mizener, " *The Fathers and Realistic Fiction*," *Accent*, 7 (Winter 1947), revised and reprinted as "Introduction" to *The Fathers* (1938 ; rpt. Athens : Swallow Press, 1990), pp. ix-x.
- 3) この言葉は、黒人奴隷にとって地獄行きも同然の意味をもった「川下に売られる (sold down the river)」という表現へのアイロニカルな言及を含んでいる。Radcliffe Squires, "Allen Tate's *The Fathers*," *Virginia Quarterly Review*, 46 (1970), 645.
- 4) Lynette Carpenter, "The Battle Within : The Beleaguered Consciousness in Allen Tate's *The Fathers*," *The Southern Literary Journal*, Vol. VIII, No.2 (Spring 1976), 8-10. この論文には、いわゆる「レイプ・シーン」でなにが起きているのか、また当事者の動機はなにかを、合理的に詳しく説明している箇所がある。スーザン黒幕説を提出しているが、結局は説得力のある推測の域を出ない。
- 5) バカン少佐によれば、彼はかっとなってセムズを射殺してしまったという手紙をポウジーからもらっている。後悔の念と誠実な真情にあふれた手紙のようであるが、そうしたあまりにも人間的な感情はポウジーの実像にはそぐわない感じがする。実際、ポウジーはその後ささいなことで、今度はラングトンを撃ち殺しているのである。
- 6) Carpenter, 10-13. カーペンターはこの場面を詳しく分析して、ポウジーはセムズがイエロー・ジムを殺すように仕向け、殺害の正当な理由を確保したうえでセムズを射殺しているのだと述べている。たいへん興味深い解釈だが、合理的な動機を求めるあまり、ポウジーの人物像を捉えそこなう結果に陥っているように思える。そこには人間の行動がすべて合理的な動機に還元できるという前提があるが、まずその前提から疑ってみるべきではないだろうか。
- 7) Carpenter, 19-22. カーペンターはレイシーの視点の限界を指摘し、レイシーは自分のポウジーに対する感情を正当化するために、ポウジーの行動を合理化する形の物語を構築しているのだと、考えている。